
黒猫と少年

イーグルテイル・サイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫と少年

【Nコード】

N5344C

【作者名】

イーグルテイル・サイ

【あらすじ】

黒猫のレンと少年サンの冒険ファンタジー。なぜこの国はこんなったのか？旅をしながらいろんな事にあうレンとサン。彼らが旅の途中にであったものとは？「殺すときは確実に中途半端だと自分が死ぬよ」これを読んだら旅を試みたくりますよ。絶対に！！！！

ある小国の盗賊の話（前書き）

この話は、最後にはみんなハッピーエンドとは行きませんので、人間の汚い部分もありますので。

精神年齢5歳いかのかたはお読みにならないよう。
読むか読まないかは、あなたの心しだいです。

（ホラーではありません）

ある小国の盗賊の話

ある森に、少年と黒猫が夜営していた。

「みんななんで、人のものを奪うのかな？」

少年はばかばかしそうにいった。

となりにいた黒いねこが答えた。

「なぜそんな事をいきなりさ！ 分かるわけないじゃんさ、君は僕の2倍生きているんだから

君が、知れないならさ、ぼくが知るわないじゃんさ」

「そういえばそうだったねえ。 レンは、まだ7歳だもんね」

猫のレンは、少し気を悪くしたようだ。

「まだ7歳とかいうな！ サンと同じくらいの知能はあるさ、ただ知識足りないだけさ」

「それよりどうして、そんな質問ばくにしたのさ」

サンはにっこり笑った。

「それはね、昨日の村の盗賊のことだね」

レンがあきれた顔で

「その盗賊ってさ、昨日の村じゃなくてさ、おとといの小国の盗賊

じゃない？」

「あれそうだったけ???」

レンはさらに追い討ちをかけた。

「君の知能は僕の半分以下だね。あきれるよ……………」

「ははっはは そうだねレン。」

ある小国の盗賊の話

その小国は、森の中にあつた。

「あきれちゃうよ」

「え？ 何がレン」

「だって、さこんなにマタビがあるのに、手をつけないなんてさ
！」

「しょうがないよ。レンこの国はね、森のものに手を付けちゃいけないんだよ」

レンが怒りながら

「サン、だって宝の持ち腐れだよ。こんなに、木の実もあるし、いい材木もある、いい森なのにさ」

「この国の伝統だから、ぼくたちは、とやかく言えないよ。」

しかしレンがまだ納得してなかったようで反論を試みた。

「でもさ」

ガサ！

草の音でレンの声はかき消された。

木の影から人が出てきた。

中年の男だった。たいそうな銃を持っていた。

「よう兄ちゃん」

サンが礼儀正しく

「こんにちは」

といった。

「は！生意気なガキだな。俺は銃を持っているんだぞ！ わかるよなあ！」

レンがため息をつきながらいった。

「そんな大きな声出さなくても分かるさ……ねえおっさん
逃げたほうがいいよ」

「はあ 俺が猫とガキにやられるとでも思ってるのか?」

「そう思うよ。死ぬよ盗賊のおっさん」

「レン敵をあおるのやめてくれよ、いいかげんね」

「だって本当のこといつてるじゃんさ、サン」

盗賊の男はついにきれた。

「ふざけんなよてめら!! さっさと荷物全部出せ!!!!」

サンが再び丁寧に

「申し訳ありませんが、あなたに荷物をあげる理由がありません。
それでは」

サンは男を無視して小国に向かって歩きだそうとした。

その時

ドン!

銃声が森にとどろいた。

銃で撃たれたのは、サンではなく盗賊の男だった。

盗賊の男の右腕は見事になくなっていた。

「サン少しひどすぎない？」

「いいやだめなんだ。中途半端だと逆にやられるからね。」

サンは出した銃を盗賊の股間に当てた。

「さて大事なところが、星になりたくなければ金を出してください」

「サンはさ、鬼だね」

「鬼にしないと世の中生きていけないよレン」

盗賊の男は放心状態だ。

いまだに自分が子供に負けた事実から逃げているようだ。

冷酷にサンが

「答えを聞きましょうか、金を出すか、大事なところを星にするか。」

男は答えた。

「わかったよ若造が俺の負けだ」

しかし男は金を出さなかった。

「俺について来い。国に案内する」

「あのさ、盗賊のおっちゃん 案内は必要ないだよ。そうだよねサ
ン？」

しかし返ってきた答えは

「いえ。国に案内してください。なぜ僕たちを襲ったのかも教えて
ください」

盗賊の男は、腕を治療した後に歩きながら話し始めた。

「かしこいな、その猫と違って」

レンは猛烈に怒った。

「サン！ この男の股間を使い物にならないにふうしてくれ！！！！
！！」

「レン落ち着こうよ。話し聞こうよ」

「話していいか？」

レンが答えた。

「最大限の敬意を表してね」

「サンていったか、お前さんは気づいたんじゃないか」

「はい、あなたは、あの国の国民ですね？」

「そうだ。あたりだ」

「サンこの男は、盗賊じゃないの？」

「黒猫さんよ。鈍いな」

「あんたかも知っているとは思うが、俺の国は森のものに手を出せない」

「つまり、食べるものが不足しているということさ」

レンがついに質問した。

「だから食べ物を奪ってたのかよ」

盗賊の男は、あきれた顔で

「馬鹿だな」

「なんだと!!」

サンが

「レン 旅人から食料を奪っても、たかが知れてるだろ。だから・
・」

「金をもらうのさ俺の国はな」

「その金で、隣国から食べ物を買っのさ」

「そういうことか」

「サンつまり盗賊が職業の国てことかい？」

「そうだよレン」

盗賊の男が金を渡してきた。

「それとこれは、金だ。受け取れ」

サンが受け取った。

「いいんですか。お金を渡して？」

「あああ。それがおきてだ」

歩いていた道が2つに分かれた。

「左の道を行け。国に入れられない。」

「そうですか。残念ですね。国に入ってみたかった。でも仕方ありませんね。それでは」

レンが最後に今までの復讐の言葉を吐いた。

「じゃあね。逆に金と右腕を取れた、まぬけな盗賊さん」

盗賊の男は背をむけて、右の道を歩き始めた。

かすかに笑いながら

「サン思わぬ稼ぎをしたよ」

「道を変えよう」

「サンどうしたの？いきなにさ」

「きつと罠があるよ」

「えっ何で？」

「お金がほしくて盗賊もやる国が、お金をくれると思ったのかい」

「そうか！ 罠にかかった僕たちから金を奪うのか！」

「そのとおり、だから草むらをいくよ」

「サンこれ草むらじゃなくて、ジャングルだよ」

「ははそうだね。レン」

その後、遠くから大勢の失望した声が聞こえた気がした。

ある小国の盗賊の話 完

ある小国の盗賊の話（後書き）

初めてなのでね。

おもしろくないとは思いますが。

とにかく評価してくださいね。

三日月の夜にて（前編）

三日月がきれいな夜中に大きな声を出している猫がいた。

「サン！次の国はどんなところ？」

「レン行くまでわからないよ」

サンがさらに

「だってレン。この前の国は、いい国ってゆわれていたのに……」

「悪党ばかりいた。でしょ」

「そうだよあの国で何人殺したか」

話しているうちに国の城門に着いた。

城壁には、地獄絵が書いてあった。

レンが

「この国の人趣味は最悪だね」

「まあ人それぞれだからねレン。」

しかしサンも明らかにひいていた。

「早いところはいろいろサン」

「そうだね寒くなってきた」

ドンドンとサンが城壁をたたいた。

「すみません！旅のものです！」

返事はない。

再びドンドン！と強くたたくと

バキ！木が折れる音がした後。

ギイと門が開いた。

「サンは相変わらず力が強いね」

「レン違うよ。きっと木が腐っていたんだよ」

「僕が見た限りだとこの門は新しいから、腐ってないよ」

「とにかく入ろう（汗）」

入ると20M先に第二の城壁があった。

「どうやら2重城壁らしい」

「城壁の上に人がいるから聞いてみようよサン」

「そうだね」

するといきなり、野太い声が聞こえてきた。

「何をしても、朝になるまでは入れんよ」

右側に若い男の商人がいた。

暗くてきずかなかったようだ。

レンが質問した。

「なぜ入れないんだよ？」

若い商人は、答えた。

「狼人間が出るからさ」

「おっかないだろ、ボウズ」

・・・・・・・・

サンが沈黙を破った。

「理由はそれだけですか？」

「ああそつだよ。」

「何百匹いるですか？」

「1匹だ」

「それだけで!？」

「ボウズもしかして、初心者だろ。旅をして何年になる？」

サンが答えるより先にレンが答えた。

「4年さ、実力があるから旅をしているんだ」

しかし若い商人は、疑わしそうな顔をした。

「まあ、とにかく朝までは国に入れん」

「じゃあさ、ここで眠れと？」

「そうさ狼人間は、朝は出ないからな」

「じゃあな。ボウズ仲間が読んでるからな」

そついうと商人は、闇の向こう側に消えた。

「いったね」

「うん、でもさおかしい。」

「何がさ？」

「一つは、狼人間は、満月にしか現れない聞いた」

サンは空を見つめて行った。

「なのに今日は、三日月だ」

「普通なら狼人間は出ない」

「もしかしたら国の人は、知らないのかも」

「いやそれはないよ。この国は、商人が来ていた」

「商人の中の一人ぐらいは、これくらい知っているはず」

レンが感心したように

「すごいよ！サン博識だね」

「じゃあさ、次のおかしい所は？」

「・・・・・・・・。」

「次のおかしい所は？」

「・・・・・・・・。ごめん忘れた。」

「そんなことだろうと思った！。いつもこんな感じだもんね。」

サンは自分自身に失望していた。

「サン気にすることないよ。いつものことさ」

「まあね・・・・・・・・ハア。いつものことか・・・・・・・・」

大きなため息をついたサンは、寢床を探し始めた。

「サン！ここでいいよ。これ以上のところはない」

「仕方ないね。ここで一夜明かそう」

二人は、たいまつの上に、寝た。

朝日が上った頃に大きな音の放送が来ました。

カン！カン！カン！

「朝が来ました。皆さん元気に働きましょう」

「まだ眠い・・・・・・・・」

とレンが。

「ああよく寝た」

とサンが。

「レン起きて」

サンがレンの小さな体を持ち上げた。

「あのさ・・・サン・・・まださ・・・ねむたい」

「さっきの放送聞いたろ。世の中の人には起きている時間だ。さあ起きよう。」

「でないと、とまたここで、一夜を過ごすよ」

レンはまぶたを、すばやく開けた。

「それはやだ」

「僕もさ」

「だから早くおきよう」

「うん」

「朝食はどうするのさ、サン」

「国の中で済ませるさ」

「そう入ろうか・・・まだ眠たい」

「いつものことだろ」

二人は門へと急いだ。

三日月の夜にて（前編）（後書き）

まあとにかく評価してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5344c/>

黒猫と少年

2010年10月10日11時45分発行